

---

# 逃げ水の中のレール

冴木よしえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃げ水の中のレール

### 【Nコード】

N7246A

### 【作者名】

冴木よしえ

### 【あらすじ】

鉄道工事に従事する季節労働者として、岩手から上京した青年。東京に行けば、稼いだ金で遊べる。田舎から脱出するチャンス。良い事ばかりを頭に描いて新幹線に乗ったが……

セミの声が煩い。

碎石から跳ね返ってくる熱さで、Ｔシャツから出た腕が赤く火照っている。

工事監督の指示の音が、遠くから聞こえる。

遠く？

すぐ隣に居たはずなのに。

目の前のレールがぐにやりと曲がる。

次の瞬間、腕に碎石の痛さが。

頬にレールの熱さが。

頭に親友の音が、届いた。

里村は、岩手から上京してきた。就職のためなのだが、一般的な就職するための上京とは少し違う。季節労働者、という名目で上京しているのだ。

そう、ただの名目。実際に季節労働者の本来の意味で来ているのではない。季節労働者は、農業や漁業に従事しているものが、本来の仕事のない間（通常は雪で覆われる冬など）に、上京して期間限定で働くのだ。

季節労働者には、季節労働者だけに適用される雇用規定がある。半年間以上季節労働者として勤務すれば、実家に戻った際にすぐに雇用保険が下りる。そして一ヶ月休んだ後に上京して働く。半年に

一度ももらえる雇用保険は、割のいいボーナスのようなものだ。常用されるわけでもなく、一ヶ月休みももらえ、そして半年に一度ももらえるボーナス。田舎から解放されて、都会で遊べる特典付き。宿舎がある会社に入れば、食と住の心配はない。

実際にはその働き方は、禁止されている。季節労働者は、あくまで自分の地方に農業なり漁業の仕事を持っていて、その合間に上京するのが鉄則。しかし、その法の目を潜って働く者は結構いるのだ。里村もいずれは自分も季節労働者に、と思っていたのだが、上京するきっかけが見つからない。東京のどこの会社に入れば、季節労働者で働けるのか解らなかった。

そんな折、親友の久慈道が上京するという噂を母から聞いた。部屋に戻った里村は、すぐに携帯に電話して、久慈道を問い詰めた。

「上京するんだって？ 何で？ お前も季節で行くのか？」

通話が始まると、すぐにそう捲くし立てる。電話口からは、驚いたような相槌と、小さく笑うような鼻から抜ける声が聞こえた。

「ああ、季節で行くんだよ。親父の会社で人手が足りないっていうから。お前も行く？」

電話の向こうの久慈道が軽く聞いた。里村は、小さくガッツポーズを決めて、少し顔を赤らめて頷く。

「ああ、お前の親父さんも季節で東京にいるんだっただけか…。連れてつてくれ。俺、バイトは明日にでも辞めるから！」

「そんなに焦らなくても。ゴールデンウィーク明けくらいに上京するんだ。もう一人連れて行っても大丈夫か、親父に聞いておくよ。それまで、バイト辞めるなよ？」

「解った。なるべく早く返事くれよ。このチャンスを待ってたんだ。はいはい、と軽くあしらうような久慈道の声の直後に通話は切れた。里村は、携帯電話を持ったまま、右へ左へとウロウロしている。「やつと東京に行ける…。金も稼げて、東京でも遊べて…」

里村は破顔して、ベッドに腰掛けた。良い事ばかりを想像して、仕事と言うよりも、修学旅行で東京に行くような気分だった。

2日後。久慈道から電話が来た。

里村と久慈道は、共に東京の鉄道工事会社で、季節労働者として働くことになったのだ。

ゴールデンウィークが明けて、共に新幹線で上京した。まずは3ヶ月勤めれば、この上京に掛かった旅費も負担してくれるというのだ。

なんて良い会社なんだろう。季節労働者を雇ってくれ、安い金額で宿舍も食事も用意してくれ、更に実家と東京の旅費まで見てくれるなんて。

そんな里村の浮かれた気分は、上京二日目で粉々に砕け散った。

上京初日こそ、仕事はないので東京で駅付近を見学できたものの、二日目には仕事開始。それも、昼も夜も働くのだ。寝る時間と言えば、夕方と、朝方のみ。話しに聞くと、それが連日続くという。

「久慈道、こんな仕事だって聞いてたのか？」

里村の投げかけに、久慈道は驚いたように目を見開いた。

「知らなかったの？ 軌道工事は、昼間に簡単な作業や工事の準備をして、電車が通らなくなる夜間にレールや枕木の工事をするんだよ。本気で東京で遊べると思ってたわけ？」

「だって、昼に仕事したら、夜は休みかと…。昼夜が連日だなんて思ってたかったよ。仕事がない時間は身体休める以外に何もできないじゃん」

「だから、賃金のいい仕事なんだろう。無理そうなら帰れよ。数週間で田舎へ帰る奴も珍しくないみたいだし」

里村はため息をつきつつ、宿舍の食堂でご飯を口に運ぶ。宿舍の

料理人は同じ東北の人らしく、馴染みのある味付けで、それは気に入っていた。東京に来て、気に入ったのはそれくらい。宿舎は隣の音が聞こえるような薄い壁だし、仕事以外の時間は寝るより他ない。年上の先輩たちに、ここでの楽しみは？と聞くと、「仕事のあとのビールだな」とつまらない答えが返ってくる。

つまらない田舎の生活から逃げて、東京に来たのに。現実、泥まみれになって昼も夜も働く。会社の駒になって、汗だくになって働いて。

そしてその泥と汗で作り上げたレールの上を、綺麗に着飾った都会人たちが冷房の効いた箱で通り過ぎてゆく。

本当は、自分があちらの箱に乗りたかった。

理想と現実のギャップがあまりにも大きかった。

「大変なのは大変だけど、親父の話だと遣り甲斐があるみたいだし、短期間でいい稼ぎになるからな。頑張ってみたら？」

二本目の缶ビールを開けながら、久慈道が微笑む。里村は、数え切れないほどの何回目かのため息の後、こくりと頷いた。

暑い夏が来た。

里村は東京の夜の街などを遊ぶこともなく、二ヶ月が過ぎた。真面目に軌道工としての作業を勤め、同僚や監督からも認められつつあった。

「今夜もタンパーかよ…。あの振動は、いつまでも身体に残るから、嫌なんだよな」

昼間の作業から帰ってきた里村は、夜間作業の予定表を見ながら自分の行動を確認する。今晚は久慈道と共に、道床整備の仕事が入っていた。椅子に座って安全靴を脱ぎ、首に掛かっているタオルで汗を拭いた。頬は赤くなり、唇がカラカラに乾いて、色が悪くなっている。

「お前、水分取ってる？ 現場にポカリのタンクが行ってるだろ？」  
久慈道が心配そうに顔を覗き込んだ。

夏の現場には必ずイオン飲料のポリタンクが常備される。しかし、軌道上で仕事をしているときにトイレに行きたくなったら、近くのコンビニエンスストアか、歩いて駅まで行かなくてはならない。暑い中、その距離の往復するのも面倒だった。

「トイレに行きたくなったら面倒だからさ。あんまり飲んでないんだ」

「熱中症になるぞ。朝礼でも毎日言ってるだろ。水分と塩分の補給を忘れずにつて…」

「あの、塩タブも嫌い。いいんだよ。今まで、何とかなってるんだから」

イオン飲料と一緒に用意されている塩タブレットも、里村は口にしていなかった。塩の塊を口にすれば、更に喉が渴く。久慈道の心配をよそに、スリッパに履き替えた里村は、安全靴をロッカーに片付け、風呂場へと向かった。

翌日は東京で初めての真夏日を記録した日だった。

休憩の時間も、里村は水分を取らなかった。水分を取るのは、唯一昼休みだけ。

里村は昼休みの弁当も食べずに、ものすごい勢いで水分を体内に入れた。しかし、身体の渴きは落ち着かない。何時までも火照った身体を冷ますように水を求める。

「里村、大丈夫か？ そんなに一気に飲んでも……。だから、仕事の合間に少しずつ水分補給しないとって……」

「わかつてる……！」

立ち上がった里村は、ぐらりとよろめいた。近くにあったコンクリート柵に凭れ掛かる。ドクドクと心臓が脈打つのが解る。身体の中が熱い。毛細血管に流れる血までもが、灼熱だった。

「休んでろよ、里村。監督には、俺から声をかけておくから」

久慈道の声を無視して、ヘルメットを被る。コンクリート柵の切れ目から、軌道内に入り込んだ。目の前の風景が歪んでいる。

ダメだ。まだここで働かないと。

セミの声が煩い。その声に重なるように、久慈道が監督を呼ぶ声が聞こえる。

逃げるように法面を登って、列車監視人の傍に行く。作業をスタートさせなくては。

東京で遊ぶことはできなかった。せめて、稼いで帰らないと。半年頑張れば、俺も冷房の効いたあの箱に乗れる。レールを整備する側じゃない。レールに乗って、賑やかな街へ行きたい。

久慈道が呼んだ監督が傍に来た。

列車監視人の笛が鳴る。

監督の怒鳴り声。



電車の警笛。

列車監視人の笛の音が電車の音に重なる。

腕に感じる碎石の角。

頬に感じるレールの熱さ。

叫び声を上げる親友。

電車の警笛が遠ざかる音と共に、意識も遠ざかっていった。

目を開けると、白い空間だった。

白い壁。白いカーテン。白い布団。白い人。

「里村。気がついたか？」

ようやく色が戻る。久慈道の着ている青い作業服に、何故か安心した。白以外の色を発見しただけで安心するなんて。何があつたのかを考えるよりも先に、そんな些細なことで小さく笑ってしまった。「何、笑ってるんだよ？ 大変だったんだぞ」

ようやく何が起こったのか考える。軌道内で倒れたはず。最後に聞いたのは、列車見張員の笛と電車の警笛。

電車が来ていたのだ。レールに倒れこむ直前に。

「電車の目の前でお前が倒れそうになるから、監督が慌てて起こして、反対車線まで飛んで避けたんだよ。俺達のいるところから見た

ら、監督と一緒に電車に巻き込まれたように見えてさ。すげー焦った……」

ほっとしたように涙ぐむ久慈道を見て、ぼんやりと風景を思い出す。近づく電車の目の前で意識を失いそうになったのだ。そして、近くにいた監督に助けられた。助けられていなかったら、今頃身体は粉々になっていただろう。軽い気持ちで出てきた東京で、この命が終わっていたかもしれないのだ。

「お前、体重軽くてよかったって……、監督が言ってたぞ」

冗談のつもりなのか。久慈道の語尾が少し笑っていた。でも、濡れた瞳が真剣にこちらを向いている。

「ごめん。無理しすぎた」

それだけ言うと、心配する久慈道の視線から目を逸らした。

ただ、田舎から逃げたくて、久慈道を追いかけて来た。

ただ、東京へ来たいというだけで。

遊べないのなら、せめて稼ぎたいばかりで。

ただ着飾って、冷房の効いた電車に乗って、都会で遊びたかったのだ。

「俺、岩手に帰るわ。退院したら……、実家に帰る」

久慈道が静かに頷いた。

東京の思い出は、暑さで歪んだレールと、遠くのネオン。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7246a/>

---

逃げ水の中のレール

2010年10月9日13時19分発行